

いまを 見つけて

第4回



太田 愛

おおた あい／香川県生まれ。1997年テレビシリーズ「ウルトラマンティガ」で脚本家デビュー。「TRICK2」「相棒」などの脚本を手がける。2012年『犯罪者クリミナル』（上・下）で小説家デビュー。13年に『幻夏』を発表、17年には3作目の小説『天上の葦』（上・下）を刊行。



人間の心と行動を統制する 国民精神総動員運動

役に立つか立たないかという
意識をつくる

前回までにお話ししたとおり、戦時中、新聞は軍と手を取り合って戦意高揚を図り、大きな利益を得ていました。では、その一方で国はなにをしたかというところ、一人ひとりの人間の心と行動を細かく統制しはじめるのです。そのキーワードが「お国のため」でした。1937年（昭和12年）という割と早い段階で内閣が「国民精神総動員運動」というものを決定しました。どんなことが行われるのか考えただけでもとても気味の悪い並びのこの国民精神総動員運動は、国民が、お国のために、精神を総動員しようというものでした。「一億総」というのはこのころからはじまっています。国家のために自分を犠牲にする、自己を犠牲にして尽くすということが正しい姿であり、その上で心のもちかた、食べるものから着るもの、暮らしの細部にまで非常に細かな指示が出されました。そしてそれは、『国民ひとり残らず』という方針をもって徹底して実施されたのです。

たとえば、ピラを渡してもまだ字が読めない

い子どもたちには、紙芝居を作って、路地の裏うらまでおじいさんが紙芝居で教え込んでいく。その世代の人たちは、本当に小さいときから「国民精神総動員運動ってこういうものだよ」と教えられていきました。その子どもたちが数年後には学徒動員で工場などで働くようになっていくわけです。

このように当時、国は個人の内面に踏み込んで縛りをかけていきました。国のために役立つ人間にこそ価値があるんだという考えが深く浸透していくと、同時に、国の役に立たない者は存在価値がないやっかい者で、守る必要のない迷惑な存在だという感覚が無意識のうちに共有されていったのです。

昨年の夏、ある政治家が、国がどんどん少子化していくなかで、子どもを生まないということは非生産的だと発言して問題になりましたが、役に立つか立たないかで切り捨てるという思想が、通底するものとして今もそこにあるような気がします。

防空法の制定

役に立たないものは切り捨て、役に立つも

★読者プレゼント★

太田愛さんのサイン入り『天上の葦』上・下巻を1名様にプレゼントします。はがき・FAX・メールにて、お名前・ご住所・感想をお書きのうえ、7月末日（当日消印有効）までに『みんなのねがい』編集部までお送りください。当選は発送をもって代えさせていただきます。



のはとことん尽くさせるという、国民精神総動員運動で強化していった考え方を、実践するためにつくられた法律があります。それが1937年に成立した「防空法」です。これについては早稲田大学の水島朝穂さんがたいへん詳しい著作を書かれています。防空法は当初誰も想像しなかったような形の縛りとなって大きな犠牲を生んでいきます。拙著『天上の葦』のなかでは、太平洋戦争開戦の前年、1940年に新聞社に入社したひとりの青年の目を通して、防空法がどのように機能してどんな犠牲を生んだのかというところを描いています。防空法は改正を重ねていくことで、非常に凶悪なものに変わっていききました。治安維持法も同様です。特定秘密保護法、共謀罪など、この5年間でつくられてきた法律は、今は眠った形になっていますが、今後どのように改正されて、どういうふうな恣意的に使われていくかわかりません。これは十分に注意しないといけないことだと思います。